

第 64 回神奈川建築コンクール一般建築部門 最優秀作品選評

「Port Plus 大林組横浜研修所」

審査委員 鈴木 信弘

建物すべての構造部材、つまり柱・梁・床・壁のすべてを有機物である木材によって構成するという試みは、現代の都市部の建築群に対しての新たな挑戦である。昨今、鉄筋コンクリートの躯体に木材を貼るという表面化粧を施せば、テクスチャーとしての木質空間は容易に作れる。しかしこの計画は循環型資源である木材の利用を拡大・促進することにより、都市部での木造建築の普及を本気で考えて高層物件に取り組んでいる。

また木質空間が、勤務中の健康増進や生産性向上についてどの程度効果があるか、空間との相関関係を検証していると聞いた。こうした実験的な試みが神奈川の地に実現したことは意義があり、社会的に十分なインパクトを持っていることが高い評価に結びついた。

近年、都市部での建設工事では、騒音、粉塵、振動、運搬などによる近隣への影響が問題視されているが、このビルはそうした施工環境の面で周辺地域に対して RC 造・S 造に比べてクリーンで、その結果工期と生産性の向上に良好な結果をもたらしたとの報告を受けた。これは建設業の持続可能性に対して新たな活路を示していることと思う。

オフィスビルの利用者は、建築を影で支えている構造技術や設備インフラについて関心を持つことはほとんどないだろう。法規制の厳しい防火地域に建つ純粋な木造の耐火建築物であることも、現時点で木造ビルとしては国内最高となる高さ 11 階建て（44m）であることも知る由もないだろう。だが、ガラス越しに透けて見えるマッシブな柱や梁の違和感と安心感、木材の持つテクスチャーの圧倒的な量塊感などが直球で視界に迫ってくる体験は驚きであろう。近い将来、都市部の建築物は、あたりまえのように木造で構築されるだろうか。本計画で木造都市の一端を体験したということなのだろうか。そのイメージの咀嚼にはまだ時間がかかりそうな気がしている。